印刷未来像

メーカー・ベンダーのモノ・コトづくり2017

プロセスフリープレート

SONORA XJ本格拡販で倍増目指す

コダックジャパン　藤原社長に聞く

年初から群馬工場で生産開始

製販一体で素早くニーズを反映

一昨年のIGASを機に発売されたプロセスフリープレート「SONORA XJ」は2016年、顧客ベースで5倍増を達成した。コダックジャパンの藤原浩社長はその背景に現像機・現像液がいらない経済性と環境性、刷り出しの早さ、品質の安定性、高い生産性を挙げる。2017年は倍増を目指すという藤原社長に話を伺った。

コダックジャパン
代表執行役員社長　**藤原　浩氏**

2016年の印刷市場は今までの傾向と変わらず厳しかったが、その中でも次のビジネスを模索する動きが見え始めた。コダックが提供するビッグデータのソリューションにもニーズの高まりが強まっており、ビジネスの種を積極的に探して今の閉塞感を打破しようという気配が感じられる。

コダックとしては昨年、プロセスフリープレート「SONORA XJ」のビジネスが非常に大きく躍進した。2015年6月にリリースし、2016年の年初に「SONORA XJ」の顧客数を1年で5倍にするという目標を立てた。CTP市場全体の大きさからはまだまだだが、この目標が達成できたということは、プロセスフリープレートの良さを認識して頂けたことだと確信している。本格的な販売増に向けての基礎ができた年だったと思う。年の後半には大量にお使いいただくお客様が増えてきた。あるお客様では月に1万㎡以上に達している。プロセスフリープレートが広い領域で認められてきた証の一つだろう。

「SONORA XJ」が受け入れられているのは、現像有りのプレートと全く違和感が無く刷れると体感して頂けているからだ。しかも自動現像機がいらない。つまり、自現装置に関わる人も、スペースも、電気も、プロセスもいらない。CTP工程の究極の自動化といえ、経済的なメリットも大きいものがある。

品質面でも刷り上がりがきれいだというフィードバックを頂いている。現像液を使用すると、CTPといえども微妙に網点に不均衡が生じる。プロセスフリープレートは原理的に自動現像機の中で起こる不確定要素が全くない。その結果、品質の安定に加えて、刷り出しも早く、損紙をあまり出さずに本生産に入ることができる。ある程度のロングランが可能で、オフ輪でもほとんどの仕事をカバーできている。

SONORAの販売は海外が先行した。国内で発売を遅らせた理由は日本市場で求められる省電力UV印刷への適性を高めるためだった。現在、「SONORA XJ」が国内で省電力UV印刷用のプロセスフリープレートとして唯一の選択肢となり、その判断は正しかったと思う。実際に、無処理版の従来品である「THERMAL DIRECT」からの切り替えユーザーを除外し、一昨年からの新規ユーザーの約3割が省電力UV印刷機のユーザーだ。省電力UV印刷機は市場全体のまだ1割程度のため、省電力UV機の設置に先行してSONORA XJがこの領域に浸透している。

昨年9月には改良を加え、版面の視認性を従来比15倍にまで高めた。作業性が良くなり、文字物などで視認性を求めるユーザーの要望を満たすことができた。2017年の拡販につながる良い材料になったと思う。

昨年のもう一つの大きなトピックスは、インクジェット輪転デジタル印刷機「PROSPER 6000 C」の国内一号機がトッパン・フォームズ様にご採用頂いたことだった。立ち上がりが非常に良く、生産機としてすでに稼動している。もう一つがフレキソの分野であり、機器、消耗品が予想を上回る実績を残せ、今年に向けて良い流れができた。

搬送機や印刷機にインラインで装着するインクジェットヘッドの「PROSPER Sシリーズ」の稼動率は非常に高い。通常、オフ輪用のインクジェットヘッドの稼動率は3割と言われているが、PROSPERは約6割になっている。消耗品は予想以上に順調だ。

しかし、オフセットとデジタルのハイブリッド印刷は徐々に増えているものの、想定したスピードよりもゆっくりと進んでいる。バリアブルでどういうコンテンツを提案するか、企画の段階でノウハウが必要になるからだろう。多品種・大ロットは一定のニーズがあり、トナーベースのデジタル印刷機「NEXPRESS」でもビッグデータを利用してDMのコンテンツを作り、仕事を増やしているユーザーもおられる。ハイブリッド印刷やバリアブル印刷の進展にとってコンテンツと結び付けていくことが重要になる。

AI、IoTで印刷産業がどう変わるか

昨年のdrupa2016でコダックのブースは大変好評だった。一番目を引くストーリー性のあるブースとの声も頂いた。コダックが印刷業界に向けて、幅広いポートフォリオによってコミットしていることを示せたかと思う。デジタルからトラディショナルまでの新製品を展示し、実機でその進化をデモンストレーションでご覧になって頂けたことがインパクトを与えられた要因になった。コダックブースではトッパン・フォームズ様の成約やCTPの累計販売台数2万1千台、デジタルフレキソ製版機の「KODAK FLEXCEL NXシステム」の500台目受注のイベントがあり、成功裏に終えることができた。

国内でのdrupaのフィードバックは昨年後半から始まった。先行してワークフローシステムの「PRINERGY 8」がリリースされ、今年後半から順次、他の新製品を紹介していけるだろう。

drupaでは〝プリント4.0〟というコンセプトが掲げられたが、印刷業界にとってはまだ距離があるという印象を持った。コダックも競合他社もこの領域はまだ緒についたばかりといえる。GEが航空機のモニタリングをしているように、現在のCTPシステムの全てがモニタリングで状況を監視できているわけではない。コダックとしてはまだ5割から6割にとどまっている。これが100%に達すれば周辺のシステムがIoTを通じてリンクしていくだろう。CTPシステム自体が不具合を判断して自己修復することができるかもしれない。潜在的なニーズは高く、そのような将来を考えるとまだやるべきことがある。

その基盤となっているAIやIoTを使った仕組みが生活に入ってきた場合、私たちの働き方やコミュニケーションの方法は変革するだろう。脳の外部化が進み、人間が判断しなくても良い範囲が増えて行ったとき、産業の形も変わる。CTPシステムが新しい技術によって進化した時、エンジニアの役割が変化していくように、私たちは少なくとも印刷産業と、AIやIoTとの関わり方を考えていく必要があるだろう。

印刷業界の課題は人件費だと思う。機械自体の生産性が向上する一方で、まだ多くのプロセスの間に人間が介在している。人材を大切にすることは重要だ。しかし、限られた人員で多くのアウトプットを生む方向に改革していくべきだと思う。印刷の業務は銀行や医療、建設と同様にスタンダード化しにくい。ERP（経営の効率化・見える化を図るためのソフトウェア）が入りにくい業界とも言われているが、ワークフローの「PRINERGY」やMIS（情報管理システム）により高度に自動化しているユーザーもいる。自社の業務にはITが使えないと思い込まなければもっと違ったプロセスが見えてくるだろう。

新ロゴマークの浸透でブランドイメージ向上へ

イーストマン・コダックがニューヨーク証券取引所に再上場して2年余りとなる。再建当初はB to Bに特化する戦略だったが、新しいCEOも迎えて新たな動きが出てきた。130年にわたって培ってきた〝KODAK〟のブランドを使って、B to Bに限らないビジネスを強化しつつある。例えば8㎜フィルムカメラ「Super 8」を復活させた。欧州ではカメラ機能を強化したコダックブランドのスマートフォン「KODAK EKTRA」が注目されている。国内でも360度カメラやサングラスにブランドをライセンスしている。

この動きに伴って、コダックは昨年12月から全世界、全製品で、新しいロゴを採用した。皆さんがフィルムの時代から親しんできた黄色地に赤の「K」マークのロゴが復活した。

我々にとっては今年、印刷産業では「SONORA XJ」の本格的な拡販が大きな目標になる。事例を含めて基礎はできた。

2016年暮れから「SONORA XJ」は群馬工場での生産を開始した。新年からはメイド・イン・ジャパンの群馬工場製の「SONORA XJ」となる。群馬工場はコダックの工場の中でも、最も高い品質と生産性を実現している。為替的なメリットがあれば世界に輸出することもあるだろう。SONORA XJは日本発の製品で、国内に中核の研究者がいる。製販一体ということは我々の環境が日本企業と変わらないということだ。日本のお客様の声にいち早く対応できることは大きいアドバンテージになる。

社内的には昨年、営業人員を増強した。東京、大阪、福岡の各拠点を強化し、今年、その成果が徐々に出てくるだろう。売上増だけでなく、お客様対応が手厚くできると思う。

2017年の具体的な目標は「SONORA XJ」の倍増である。今年後半には自動化が進んだCTPシステムをリリースする予定だ。また、PRINERGY 8を体感して頂く機会を設けるとともに、コダックジャパンが先行しているビッグデータビジネスを周知していく。

個人的な目標は新しいロゴの認知だ。道行く人たちにコダックの存在をもう一度認識して頂き、ブランドを底上げする。コダックファンが大手を振って頂ける環境とブランドイメージを作っていきたい。

シンボルマークを復活

新ロゴマーク

KODAK SONORA XJ ＋ KODAK ACHIEVE

処理薬品が不要 薬品のランニングコストや廃液回収コストが削減できます。	ローコスト	**低コストで高品質** 独自の技術を応用し、新開発ACHIEVE専用サーマルヘッド「TH5.0」を搭載。
自動現像機不要 工程が減るのはもちろん、作業スペースに余裕ができます。	コンパクト	**省スペース** KODAKが誇るロングセラーCTP"TRENDSETTER"と同じベースフレームを採用。
廃液、廃材の削減 廃液、廃材のコストを削減できるだけでなく、環境への負荷も軽減します。	エコ	**消費電力64%削減** イメージング時のピーク電力はわずか400W。これはオフィスの蛍光灯10本分と同じです。

コダックが、皆様の印刷環境にベストなソリューションを提案します。

世界で最も広く認識されているコダックのシンボルマーク「K」マークロゴが復活します。コダックは、これからも社会への貢献ならびに皆様のビジネスの成長を支援してまいります。

コダック合同会社
プリントシステム事業本部　〒140-0002 東京都品川区東品川四丁目10番13号
TEL.03-6837-7285　http://www.kodak.co.jp